

チャー—農的暮らしの永久デザイン』田口恒夫・小祝慶子訳、農山漁村文化協会。
スコット, J. C. 2019. 『反穀物の人類史—国家誕生のディープヒストリー』立木勝訳、みすず書房。
上山春平. 1966. 「社会編成論」川喜田二郎・梅棹忠夫・上山春平編『人間—人類学的研究』中央公論社、73–99.

柳澤雅之・阿部健一編. 『No Life, No Forest—熱帯林の「価値命題」を暮らしから問う』京都大学学術出版会, 2021 年, 290 p.

山越 言*

本書は、南アジア、ラテンアメリカ、アフリカの熱帯林を生活世界とする人々の現在の姿を、丹念な現地調査によって描いた9つの章で構成される、読み応えのある良書である。また、下記に述べるいくつかの点でたいへんユニークな書となっている。

まずは刺激的なタイトルである。No Forest, No Life とは、森なくして命なし、生き物の生息（あるいは森林に依存して暮らす人々の生活）にとっての森林の重要性を主張する際によく使われる警句だが、本書の書名は、生活なくして森はない (No Life, No Forest)、とこれをひっくり返す。高圧的な森林保全政策に対して人々が行なったスコット流の抵抗 [Scott 1985] の事例集か、あるいは森林形成や維持に対する人間活動のポジティブな側面 [山越 2003] についての事例集かと、ある種の期待をもって読んだが、その予想はよ

い意味で裏切られた。

本書の編者、柳澤、阿部による序章では、FAO の統計に基づき、南アメリカとアフリカの急速な森林減少および、「もはや伐採すべき熱帯林がなくなった」(p. 4) 東南アジアの熱帯林について語られる。背景としての「熱帯林問題」は、明確に意識されている。このような急激な熱帯林の減少を止めなくてはならない、森に依存する人々の暮らしを守らなくてはならない、と立ち上がり闘うところであろう。ところが、本書の編者たちはここで立ち止まり、迷い、考え続ける。「本書は、熱帯林問題に『答え』を出すのではなく、むしろ『問いかけ』をしている本である」(p. 2)。「安易に結論を出さずに、考え続けることが大切だと思っている」(p. 6)。

本書を構成する9章は、アフリカに2章、東南アジアに3章、ラテンアメリカに4章が割り振られている。それぞれ独立した論文の体裁は保っているが、おそらくは編集方針を反映して、各章それぞれ10編程度の少ない引用文献、冒頭から地域の描写が始まり理論等の紹介が最小限な導入部、個人名つきの登場人物の丹念なライフヒストリー描写、道路や機械、会社・組合といった非人的アクターへの注目、数値・図表よりはテキストによる描写・論証、参与観察・インタビューによる人類学的記述に著者の存在が積極的に書き込まれている、といった共通点が多く、統一的な印象を与える。結果として、論文集でありながら、とても読みやすく、あたかも短編小説集のように流れに任せて読み進めることができた。個人的には、ラテンアメリカ文

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

学の短編集の読後感に近いものを感じた [たとえばバルガス＝リョサほか 1995]。本書の平易で統一的な編集方針は、硬い論文形式では失われがちな、フィールドワークの魅力の表現方法について、ひとつの模範例を示している。とくに「作品」を読みやすく一般読者に提示する手段として秀逸であり、編者らの意図にかかわらず今後なんらかの評価を得るかもしれない。

このような編集方針のもと、各章では、固有名をもつ登場人物（著者を含む）がいて、舞台としての森がある。歴史があり、政策があり、外部からの介入がつぶさに描かれる。編者が提示した本書のメッセージ「lifeを見ようということにつきる」(p. 277) のとおり、世界各地の熱帯林での「人間らしい暮らしや生き方」(p. 277) が丁寧に記述されている。そのうえで、それぞれの熱帯林問題を前に、松浦直毅（第1章）は「長期にわたって継続的に彼らに寄り添う姿勢を重視し」(p. 35)、近藤宏（第4章）は、「誰かとともにある意識に基づく新たな考え方」(p. 123) を模索し、柳澤（第5章）は、変容の主体である地域の人たちを中心に置いた「新しい協調のメカニズムを作り出していく」必要性を説き (p. 153)、石丸香苗（第9章）は、「多数の善良な倫理観が機能する社会構造こそが必要」(p. 255) と構想する。みなそこで立ち止まり、悩み、考えている。

評者は数年前、類書の編集を手がけたことがあり [山越ほか 2016]、編者目線で本書の意義に共感するところが多かった。前掲書では、アフリカの野生動物保全の文脈で、グ

ローバルな問題への解決法として普及したローカルな対話の場（参加型保全という手法）に注目し、現状を批判的に記述したのちに、地域の人々の意向を対話によって把握・実践していくことの重要性を前向きに指摘した。まさに本書同様、「未来の物語のシナリオを『そこに住む人』と一緒に書く可能性」(本書 p. 10) についての書であった。地域の人々との対話によって、森や動物の保全を考えることは、しかしながら「保全の物語」を補完するとは限らない。本書の第1章（松浦）、第2章（坂梨健太）、第4章（近藤）の事例にみられるような、開発によってもたらされ、究極的には彼らの資源を損なうであろう道路を柔軟に受け入れ利用する態度や、第5章（柳澤）の地域住民と伐採業者との協働は、地域固有の状況に応じたローカルな判断の多様性として興味深い。これらはグローバルな「保全の物語」からすれば、あるべき筋から外れた困った事例なのかもしれない。「参加型」の仕組みによってせっかくアクターとして招き入れた住民の「正しくない」意思決定を信頼するのか、という外部の保全アクターが抱える逆説が露呈するところである。地域の人々が描く「それぞれの熱帯林の書きかけの未来の物語」(p. 10) と、グローバルな運動との齟齬や協働が次のトピックとして待ち構えているだろう。本書はしかし「道は途上で、『答え』はまだない」(p. 6) という立場にあえて留まる。いっぽうで、このまま森が減り続けていいのか (No Forest, No Life)、という問題に対して、近い将来待ったなしの対策を迫られる状況も容易に想

像できる。ゆっくり未来の物語を紡ぐ時間が果たしてどれだけ残されているだろうか。

編者の努力に対しては賛辞を送りたいが、いくつか残念な点もある。本書の副題にある「価値命題」についての議論は、本書では提案こそされているが不十分であると感じた。「使用価値」「交換価値」に対する「関係価値」という概念は興味深く、本書でも適切に導入と議論が行なわれていたとしたら有益であつたろう。第 6 章（湖上ゆかり）や第 8 章（藤澤奈都穂）が描いた、Life と Forest が多様性のもとで調和する事例は、それ自体がユニークで興味深いと思うが、前述の「安易に結論を出さずに、考え続けることが大切」という方針のためか、とくに強調されずに埋没している印象である。また、本書が「答え」ではなく「問いかけ」を重視する書だとしても、それでもなお、「答え」につながる何らかのアイデアについての議論が欲しかった。たとえば前述の近藤の「誰かとともににある意識に基づく新たな考え方」(p. 123) や、石丸の「多数の善良な倫理観が機能する社会構造」(p. 255) について、もっと深く知りたかったと思う。

丸山眞男は、ユダヤ・キリスト教系列の「つくる」神話との対比で、古事記を「なる」神話として位置づけた〔丸山 1998: 353-423〕。われわれが「つぎつぎになりゆくいきほひ」という日本の歴史意識の古層に、そ

の刻々となりゆく「いま」をとらえる傾向に、現在も囚われているとするならば、立ち上がって闘わず、立ち止まっていまを描き、悩み考える本書の姿勢は（第 7 章（鈴木遙）を例外として）、極めて日本的であるといえるかもしれない。このような日本の自然観に依拠した立ち位置は、グローバルな環境問題のローカルな現場において、有意義な貢献を成しうるだろうか。日本人の編者・著者により編まれた本書が広く読まれ、熱帯林問題の解決に資するオルタナティブとして、意味ある研究・運動・実践につながることを期待したい。願わくば熱帯林の大半が失われてしまう前に。

引用文献

- Scott, James C. 1985. *Weapons of the Weak: Everyday Forms of Peasant Resistance*. New Haven: Yale University Press.
- バルガス＝リョサ, マリオ・パス, オクタビオ・オカンボ, シルヴィーナ・アストゥリアス, ミゲルアンヘル・パチエーコ, ホセエミリオ. 1995. 『ラテンアメリカ五人集』安藤哲行ほか訳, 集英社文庫.
- 丸山眞男. 1998. 『忠誠と反逆—転形期日本の精神史的位相』ちくま学芸文庫.
- 山越 言. 2003. 「ギニアの森の成り立ち—景觀に埋め込まれた生態史を読む」『アジア・アフリカ地域研究』3: 237-248.
- 山越 言・目黒紀夫・佐藤 哲編. 2016. 『アフリカ潜在力 5 自然は誰のものか—住民参加型保全の逆説を乗り越える』京都大学学術出版会.